

『天主実義』の初期刊本とその改訂をめぐって

王 雯璐

要 旨

『天主実義』は16世紀末期において中国に進出したイエズス会士マテオ・リッチの代表作である。1603年に初刻された後、繰り返し再刊された。しかし、本書の初期刊本については確認できる伝世刊本が少ないため、明らかにされていない問題が多い。そこで本論では、日本所蔵の『天主実義』初期刊本とヨーロッパ所蔵の初期刊本との比較を通して、それぞれの歴史的な位置づけを明らかにした。まず日本の内閣文庫及び蓬左文庫の刊本と、初刻本とされているカサナテンセ図書館（ローマ）の刊本の本文の校合を通して、三つの刊本が同版であることを明らかにした。その上で、当該版本が改訂されたことを確認し、内閣本と蓬左本は印刷時期が早く、日本所蔵の刊本は現存する『天主実義』の中で最古のものと言えることが明らかとなった。結論として、日本所蔵のイエズス会士著訳書が大きな文献学的価値を持っており、『天主実義』の注釈や翻訳を行うにあたっては日本に所蔵されている刊本との校合が必須であることがいえる。

はじめに

16～18世紀中国では、ヨーロッパから渡来した宣教師によって、布教活動のため、キリスト教と西欧科学に関する様々な漢文書物が刊行された。『天主実義』はイエズス会士マテオ・リッチが著した書物で、万暦三十一年（1603）到北京で初刻された。その後、版を重ねて広く流布したことで、宣教師の著訳書の中で、最も大きな影響を及ぼすことになった。中国人の学者と西洋人の学者との問答の形を取って、カトリック教をめぐる様々な議論が展開されている。この書物はカトリック布教を目的として著されたものではあるが、宗教思想をめぐる中国と西洋との実質的対話のはじまりを示すものとして、思想史上、大きな意味を持っている。さらに、『天主実義』が江戸期の日本や朝鮮朝の韓国にももたらされ、広く流布したことが諸史料により明らかとなっている。

本書は、1603年に初刻されて以来、繰り返し重刻されており、明刊本系と清刊本系の二つの系に分けられる。これまでの研究により、明刊本系には、万暦三十一年（1603）の北京初刻本、「日本向け本」とされる万暦三十三年（1605）の広東韶州重刻本、万暦三十五年（1607）の浙江杭州重刻本（燕貽堂本）があり、清刊本系には、同治七年（1868）の上海土山湾慈母堂本がある。¹各版の間の関係については、方豪氏が清刊本である慈母堂本の改訂に関

¹ その他、明刊本として1607年の翁汝信江西重版、1609年の顧鳳翔福建重版が挙げられる。清刊本

する論考を發表しており²、またメイナード (Thierry Meynard) 氏は『天主実義今注』で版本校勘を行い、初刻本とされるローマカサナテンセ図書館蔵本と燕貽堂本との相違にも言及している。

しかしながら、これまでの研究によって『天主実義』の版本をめぐる問題が全て明らかにされたとは言いがたい。とりわけ初刻本や「日本向け本」などの初期刊本に関しては、確認できる伝世刊本が少ないため、明らかにされてない問題が多い。他方、従来の研究では、ヨーロッパや中国に所蔵されている版本を主な資料として使ったが、日本に所蔵されているものはあまり注目されてなかった。³

そこで、本論は『天主実義』の初期刊本に焦点を当てる。日本の内閣文庫及び蓬左文庫の刊本と、初刻本とされているローマカサナテンセ図書館の刊本を取り上げ、初期刊本の所在とその様相を明らかにした上で、各書物の関係を究明する。さらに、そこに見られる初期刊本の改訂問題について検討を加える。

(一) 『天主実義』の初刻本

リッチが『天主実義』の執筆を始めたのは1594年頃であり、稿本が完成したのは広東から南昌へと伝道範囲が広がっていた1596年である。稿本完成後になっても、ゴアから認可が下りていなかったため、出版は一時見送られている。やがて、ゴアの異端審問官からの出版許可が下り、万曆三十一年(1603)北京において刊行することとなる。これはいわゆる初刻本であり、馮応京の「天主実義序」とリッチ自身の「天主実義引」が冠されている。

この初刻本の所在についてはじめて言及したのは、パスクワーレ・M. デリア (Pasquale M. d'Elia) 氏である。氏は『利瑪竇全集』(Fonti Ricciane) において、『天主実義』が1603年初刻され、カサナテンセ図書館に一点所蔵されているとしている(以下「カサナテンセ本『天主実

としては、清末において刊行された1904年と1935年の上海土山湾慈母堂活字版、1894年と1939年の香港ナザレ静院活字版、1898年、1933年、1938年の河北献県勝世堂版が挙げられる。さらに刊年不詳の福建欽一堂版も現存している。柴田篤、「『天主実義』の出版」、『哲学年報』第63輯、2004年107-132頁。梅謙立注、譚杰校勘、『天主実義今注』、商務印書館、2014年31-32頁。張曉林、『天主実義与中国学統』、学林出版社、2005年16-25頁。

² 方豪、「『天主実義』之改竄」、『方豪六十自定稿』下冊、台湾学生書局、1969年1593-1603頁。

³ ヨーロッパと中国の所蔵にあたり、『徐家匯藏書樓明清天主教文獻』(全5冊、方濟出版社、1996年)、『徐家匯藏書樓明清天主教文獻続編』(全34冊、台北利氏學社、2013年)、『耶蘇會羅馬檔案館明清天主教文獻』(全12冊、台北利氏學社、2002年)、『法国国家図書館明清天主教文獻』(全26冊、台北利氏學社、2009年)、『梵蒂岡図書館蔵中西文化交流史文獻叢刊(第一輯)』(全44冊、大象出版社、2014年)の一部の所蔵の影印を収めたシリーズがある。日本の所蔵本については、海老沢有道氏が監修した『日本基督教史関係漢書目録：1590-1890』(文晃堂書店、1954年)と吉田忠氏が編纂した『イエズス会関係著訳書所在調査報告書』(東北大学文学部附属、1988年)という二つの目録により、一定程度概要が把握できるが、原本の詳細は必ずしも明らかでない。

義』とよぶ)。⁴カサナテンセ図書館の前身はカトリック教会ドミニコ会の図書館であり、アジア布教に関する史料が多く所蔵されているほか、宣教師によってヨーロッパにもたらされた漢籍も数多く所蔵されている。同図書館の漢籍目録の編纂作業はまだ終わっていないが、メネゴン(Eugenio Menegon)の手になる簡略目録では、同館に所蔵されている『天主実義』が「現存最古の『天主実義』である」とされている。⁵また、メイナード氏もこのカサナテンセ本『天主実義』を初刻本かつ現存最古の刊本としており、同氏の『天主実義今注』でも版本校勘の際にカサナテンセ本を参照している。

ここで、カサナテンセ本『天主実義』の書誌について紹介していきたい。筆者の調査によって、カサナテンセ本『天主実義』は図書館の補修で既に洋装に改められ、11枚のラテン語文書と一緒に綴じられており、その中には『天主実義』の二冊が線装の形が残されていることが確認された。巻首題に「耶蘇会中人 利瑪竇述」とあり、巻首に「天主実義序」と「天主実義引」が収められており、本文は毎半葉十行、行二十字である。この版本において、燕貽堂本にある「天主実義重刻序」や「重刻天主実義跋」は見られないので、燕貽堂本より刊行の早いものと考えられる。

(二) 日本所蔵の『天主実義』初期刊本

中国で出版された宣教師の著訳書は現在中国だけではなく、ヨーロッパやロシアの各図書館にも相当の量なコレクションがある。さらに、中国で出版された後間もなく唐船持渡本として日本にも伝来され、江戸時代において広く読まれたことが確認できる。先行研究によって、林羅山は慶長九年(1604)に『天主実義』を読んでいたことが明らかとなっており⁶、これは中国で出版された宣教師の著訳書が日本で読まれたことを示す、最も早い記録となっている。

『天主実義』の各明清刊本は数多くの日本の各収蔵機関により所蔵されている。なかでも初期刊本に関しては、内閣文庫所蔵本⁷と名古屋の蓬左文庫所蔵本⁸に注目すべきである。内閣本は「林家本」とも称されるが、いつ日本に伝来したかについて確たる手掛かりはない。蓬左本が寛永五年(1628)に購入されたことは尾張家の蔵書目録によって分かるため⁹、当時長崎から書物を入手するのにかかる時間を考慮すると、日本に入った時期はその五～十年前と推定できる。題簽には、「大西問答 上」、「大西問答 下」とあり、他の『天主実義』諸版には見られな

⁴ Pasquale M. D'elia (ed.). *Fonti Ricciane, Documenti Originali Concernenti Matteo Ricci e la Storia Delle Prime Relazioni tra l'Europa e la Cina(1579-1615)*. La Libreria Dello Stato 1942-1949, Vol.II, p. 293.

⁵ Eugenio Menegon. "The Biblioteca Casanatense(Rome) and its China Materials. A Finding List." *Sino-Western Cultural Relations Journal*, XXII, 2000, pp. 31-55. 蔵書番号: ms.2136.

⁶ 伊東多三郎、「禁書の研究」、『歴史地理』第68巻第5号、1936年33頁。

⁷ 蔵書番号: 307-0112。

⁸ 蔵書番号: 158-45。

⁹ 「天主実義(表題大西問答)二冊 唐本 辰年之買本」。『尾張徳川家蔵書目録』第一冊、ゆまに書房、1999年176頁。

いため、おそらく蓬左本を整理や補修する際に付き加えられたものと考えられる。

内閣本や蓬左本、カサナテンセ本は、いずれも「天主実義序」と「天主実義引」二つの序文を収め、本文が半葉十行、行二十字である。様式も印刷も酷似しており、三つの刊本が同版であることは明らかである。

(三) 当該初期版本の判定

従来の研究では、カサナテンセ本の前のラテン語の文書がマテオ・リッチの自筆した概要であると述べ、当該本が1603年刊行された初刻本であると主張している¹⁰。上述のように、内閣本や蓬左本、カサナテンセ本は同版であるため、カサナテンセ本が初刻本である限り、内閣本と蓬左本も初刻本であると考えられる。

内閣本や蓬左本に関しては、これまでおもに日本の研究者によって言及がなされ、燕貽堂本や慈母堂本と異なる、ごく稀な版本とみなされ、版本を判定する試みも行われている。前述したように、『天主実義』には「日本向け本」が存在するが、これは中国文で書かれた書籍が日本の布教においても効果があると判断したヴァリニャーノが、『天主実義』を日本に送るため広東で新たに印刷させたものである。¹¹内閣本や蓬左本は日本に伝来し、現在も日本に所蔵されていることから、「日本向け本」と同一ではないかと思われる。この点に関してはすでに柴田篤氏によって、「校点が施されていることなどから、日本人読者を意識した刊本と推定される」と述べており、現在内閣文庫や蓬左文庫に所蔵される版本が「日本向け本」である可能性について指摘がなされている。¹²

ヨーロッパ所蔵のカサナテンセ本と日本所蔵の内閣本や蓬左本は、これまでほとんど別々に研究されてきたが、両者を視野に入れてみると、それぞれ版本を判定する結論が再検討すべきであることが明らかである。なお、カサナテンセ本が初刻本とされる理由は不十分であるため、同版である内閣本や蓬左本も初刻本と言い難い。そのため現在のところ、当該版本が初刻本あるいは「日本向け本」であるかについてもいま確定することはできない。そこで本論では、これらを便宜上「稀見初期刊行本」と呼ぶことにしたい。

¹⁰ 前掲梅謙立『天主実義今注』、65頁。

¹¹ この点については、リッチがヨーロッパに送った書函から分かる。「シナの文字は日本で一般的であるから、シナ語で書かれた書籍は、日本においても、よい効果を収めるに違いないと我々は大いに期待した。それでヴァリニャーノはこのカテキズモを、日本に送るために広東で新たに印刷せしめた。またパードレ・フランシスコ・パシヨは、私に、それがシナで非常な権威をもつようになっているので、若干部数送って貰いたいと云ってきた。」リッチ 1608年3月8日付書簡。上記の和訳は海老沢有道、『天主実義』雑考——特に日本との関連について、『増訂切支丹史の研究』、新人物往来社、1971年292頁より引用した。

¹² 前掲柴田篤『天主実義』の出版』、113頁。

(四) 初期刊本の改訂問題

『天主実義』初刻本や「日本向け本」は複数回印刷された記録は現存していない。しかし、同版であるカサナテンセ本、内閣本、蓬左本の本文を校合してみると、一致しない箇所がしばしば見られる。すなわち印刷時期が異なるのではないかと推測できるのである。ここでは本文のテキストを比較することを通じて、各版の前後関係を確定したい。なお、蓬左本は内閣本と全く一致しているため、以下内閣・蓬左本と呼ぶ。

上で述べたように、当該版本の本文は每半葉十行、行二十字であるが、カサナテンセ本ではこれに従わない一箇所が見られる。それは以下の通りである：

内閣・蓬左本上巻第九葉表第一～二行目

日又求四日以對君怒日汝何戲答日臣何敢戲但
天主道理無窮臣思日深而理日微亦猶瞪目仰瞻

カサナテンセ本上巻第九葉表第一～二行目

日又求十二日以對君怒日汝何戲答日臣何敢戲但
天主道理無窮臣思日深而理日微亦猶瞪目仰瞻

つまり、カサナテンセ本は巻上第九葉表第一行に「四日」の二文字分のスペースに「十二日」の三文字を詰め込んだのである。よって、当該版本は複数回にわたって印刷されたことと、再印刷するとき改訂がなされたことが確認できる。さらに、カサナテンセ本は内閣・蓬左本より後に印刷されたことも明らかになった。

この不一致については、すでに胡國禎 (Peter Hu Kuo-chen) とランカシャー (藍克實、Douglas Lancashire) によって言及されたことがある。ただし彼らはカサナテンセ本のみを研究対象としたことで、リッチが版木を彫った後、かつ印刷する前に修正したとのみ結論づけている。¹³しかし内閣本や蓬左本を視野に入れると、版木が彫られた後に印刷が行われ、さらに修正の後、再び印刷されたことがわかる。

また、上に挙げた例のほか、カサナテンセ本と内閣・蓬左本の本文には僅かながら文字の異同が見られる。以下の表において整理した¹⁴：

¹³ Matteo Ricci, translated, with introduction and notes by Douglas Lancashire and Peter Hu Kuo-chen, S.J.. *The True Meaning of the Lord of Heaven*. St. Louis: The Institute of Jesuit Sources 1985 p18.

¹⁴ 句読点は『天主実義今注』によった。燕貽堂本は台湾書局『天学初函』に収めた影印を参照。李之藻編、『天学初函』、台北：台湾学生书局、1965年351-636頁。

内閣・蓬左本		カサナテンセ本		燕貽堂本 (台湾書局影印本)	
上卷					
5a	乎能持，足能行	5a	手	5b	手
9a	古有一君，欲知天主之說，問於賢臣。賢臣答曰：“容退一日思之。”至期又問，答曰：“更二日，方可對。”如是已二日，又求四日以對。	9a	古有一君，欲知天主之說，問於賢臣。賢臣答曰：“容退二日思之。”至期又問，答曰：“更六日，方可對。”如是已六日，又求十二日以對。	9b	古有一君，欲知天主之說，問於賢臣。賢臣答曰：“容退一日思之。”至期又問，答曰：“更二日，方可對。”如是已二日，又求四日以對。
11b	中士曰：“正道惟 <u>（欠）</u> 耳”	11b	一	13a	一
22b	而天下之道，日益乖亂，上者陵下，下者侮上，父暴子逆，君橫臣奸，兄弟相賊，夫婦相離，朋友相欺。	22b	君臣相忌	25a	君臣相忌
34a	丕乃告我高后曰：“作丕利於朕孫。”	34a	刑	37b	刑
下卷					
14a	然夫數等之之齋	14a	所	15b	所
19b	子軻首以仁義為題	19b	孟軻	22a	孟軻
28a	苦之聖人	28a	古	31b	古
39b	或學傳以知識	39b	特	44a	特
61a	急其表，而不究其裏	61a	裏	67b	裏

例1、5、6、7、8、9、10は、いずれも内閣・蓬左本が誤字を犯している例で、カサナテンセ本では正しい文字に改まっている。後刊の燕貽堂本では訂正された後のものが受け継がれていることから、内閣・蓬左本がカサナテンセ本より先行することが裏づけられる。

以上のことから、『天主実義』の初期刊本を整理すると、内閣・蓬左本→カサナテンセ本→燕貽堂本の順に出版されたことが確定できる。すなわち、同じ版本である内閣本や蓬左本とカサナテンセ本は、それぞれ初印本（内閣・蓬左本）と重修本（カサナテンセ本）と呼ぶことができ

る。

表に挙げたテキスト上の相違のほとんどは、こうした印刷の順序に従っているが、例2に挙げた箇所は、これらとは異なっている。

(内閣・蓬左本) 古有一君，欲知天主之説，問於賢臣。賢臣答曰：“容退一日思之。”至期又問，答曰：“更二日，方可對。”如是已二日，又求四日以對。

(カサナテンセ本) 古有一君，欲知天主之説，問於賢臣。賢臣答曰：“容退二日思之。”至期又問，答曰：“更六日，方可對。”如是已六日，又求十二日以對。

(燕貽堂本) 古有一君，欲知天主之説，問於賢臣。賢臣答曰：“容退一日思之。”至期又問，答曰：“更二日，方可對。”如是已二日，又求四日以對。

ここでは、後に刊行された燕貽堂本が、他の例とは異なり、カサナテンセ本をそのまま受け継ぐのではなく、当該初期刊本の初印本に従っており、意識的にこのような修正を行ったことがわかる。上述の出版順序のみにより説明しにくい変更である。この挿話は『天主実義』首編において、中士が「天主の説を究めたい」と質問したのに対し、西士のリッチが以下のごとく回答する場面にある。

古代、一人の王が天主について知りたいと思い、賢臣に尋ねました。賢臣は、「どうか一日帰って考えることを許してください」と答えました。一日経って、「王は」また尋ねました。「賢臣は」「もう二日したらお答えできます」と答えました。こうして二日に経つと、また「賢臣は」「四日したらお答えします」と答えました。王は怒って、「なぜおまえはふざけるのか」と言いました。「賢臣は」「私がどうしてふざけたりいたしましょう。ただ、天主の道理は窮まりがありません。私が深く考えれば考えるほど、道理はさらに捉え難いものとなります。それはちょうど、目を見開いて太陽を見上げれば見上げるほど、ますます真っ暗になるようなものです。」

15

この挿話はリッチの『天主実義』に先行するミケーレ・ルッジェーリ (Michele Ruggieri) の『天主実録』にも見られる。

嘗聞古有一位人君、欲知天主之説、問於賢臣。賢臣答曰、容臣退居一月尋思、乃敢以對。至期而君問之。答曰、此理微妙、誠然難對。希乞再容一月何如。如是者已三月矣、並無以對。君怒曰、爾何戲我若此。臣曰、臣何敢戲君。但此理精微、益思而理益深、亦猶仰觀太陽、益觀而眼益昏、是以難對也。¹⁶

メイナードにより、この挿話はキケロ (前106年～前43年) の『神々の本性について』(De Natura Deorum) に原型があるという。神とは何かという問いに対し、

¹⁵ 和訳は柴田篤による。マテオ・リッチ著、『天主実義』、平凡社、2004年39頁。

¹⁶ 前掲『天学初函』、394-395頁。

詩人シモーニデース(前506年頃～前468年)の助けを借りることにしよう。彼は僭主ヒエロンから同じ問いを受けたとき、答えを考えるために一日の猶予を請うた。ヒエロンが翌日同じ問いを繰り返すと、さらに二日の猶予を求めた。こうして彼が日数を倍ごとのばしていくので、不審に思ったヒエロンは、どうしてそのような答え方をするのかと尋ねた。すると、シモーニデースは、『考えれば考えるほど、わたしはこの問題が謎めいたものに見えてくるからです』と答えたと
いう。¹⁷

とある。メイナードは、この挿話において問われた側が答えを先延ばしにする期間の数字を比較し、ルッジェーリよりもリッチのほうが原型に近いと指摘している。¹⁸本論の研究対象であるこれらの初期刊本の場合、初印本の内閣・蓬左本では各数字が上記のキケローによる文章に一致するが、重修本の「カサナテンセ本」ではまったく異なる「二日」・「六日」・「十二日」となっており、この変更が意識的に行われたことが明らかである。このような変更がなぜ行われたのか、現在のところ手がかりは見つかっていないが、今後追及していくべき課題である。

おわりに

『天主実義』は、明末の中国に進出したイエズス会士マテオ・リッチによる代表作であり、中国と西洋との最初期の実質的な対話を示す本でもあった。イエズス会士が中国の明清時代において刊行した数多くの書物はヨーロッパ、中国、日本をはじめ世界中の各図書館に所蔵されているが、現段階で整理されていない資料や、公開されていない資料も少なくないため、版本の研究は容易ではない。

本論では、内閣文庫及び蓬左文庫が所蔵されている『天主実義』とローマカサナテンセ図書館の所蔵を対象として、本文の校合を行うことを通して、当該版本の『天主実義』の刊行にあたり繰り返し印刷がなされことを確認した。その上で、従来の研究やカサナテンセ図書館の目録で「現存最古の『天主実義』」されてきたカサナテンセ本が、じつは内閣・蓬左本の重修本であることを明らかにした。初期に刊行された『天主実義』は部数が少なく、現在確認できる初期刊本はヨーロッパのカサナテンセ本と日本の内閣本と蓬左本のみであるため、非常に貴重な文献といえるが、本研究によって、なかでも日本所蔵の刊本の重要性が明らかとなった。今後、さらに日本所蔵のイエズス会士著訳書の版本研究を進め、その歴史的な位置づけを明らかにしていきたい。

付記：本稿は2016年5月7日、東アジア文化交渉学会第8回年次大会「東アジア交渉学の新しい歩み」において口頭発表したものを、大幅に加筆修正したものである。

¹⁷ 和訳は山下太郎による。『キケロー選集』第11巻、岩波書店、2000年44頁。

¹⁸ 前掲『耶蘇会羅馬檔案館明清天主教文献』第一冊、13-14頁。